

(様式3)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究(小・中学校)」
平成23年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	山口県	番号	35
-------	-----	----	----

推進校名	山口県 宇部市立琴芝小学校	研究主題	Ⅱ型
------	---------------	------	----

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題への取組状況

子どもたちによる「学び合い」のある授業づくりを通じた「確かな学力」の定着を図るために、次の重点課題を設定した。

- ・他者と関わる学びを推進する授業づくりを通して、子どもたち一人ひとりに「確かな学力」を育む。
- ・他者と関わる学びを生み出すための授業研究を通して、授業を改善する。
- ・互いに関わり合いながら、安心して学習や生活ができる学級をつくる。

研究の具体的内容

(1) 「学びの共同体」理論における「学び合い」のある授業づくりによる授業改善、マネジメントサイクルによる実践研究の推進

PLAN～児童の実態把握、研修主題の設定、仮説検証の指標設定、組織・体制づくり、年間計画の立案

研究仮説＝伝え合い聴き合う関係づくりを通して、ともに関わり学び合う授業実践と授業改善を行うことにより、子ども一人ひとりの豊かな学びの力が育つであろう。

学びと授業の様式転換

学び合う教室づくりの最も基本となる態度は、子ども一人ひとりの声を「聴く」ことを基本とした教師の「居方」と「関わり」である。「聴き合う」関係づくりを教室に築くには、教師自身がよき「聴き手」として教壇に立つことである。～佐藤学先生の理論研修(市内36小中学校全教職員に講演、各校の研修、市ビデオ研修会、先進地研究視察、近隣小中学校への研修会参加等々)

(ア) 授業改善の視点

- ① 「座学の学び」から「活動的な学び」へ
- ② 「個人的な学び」から「協同的な学び」へ
- ③ 「獲得し記憶する学び」から「探求し反省し表現する学び」へ
- ④ 「伝達し説明し評価する授業」から「触発し交流し共有する授業」へ

(イ) 学びの構成要素 ① 題材との対話 ② 仲間との対話 ③ 自分自身との対話

(ウ) 授業構成 ① 共有課題 ② ジャンプ課題

(エ) 学び合う関係づくり＝互恵的な学び

- ①学び合う関係は、教える人と学ぶ人という一方的な教え合う関係ではなく、相互に対等な対称的な関係である。
- ②できる子ができない子どもから学ぶ。「わからない」という問いを投げかける子のおかげで、それに応答する子どもたちがより確かな学びを達成する。また、「わからない」と問いを投げかける子どもが、その問いに応答する仲間たちの助言を媒介に、仲間たち以上に確かな学びを達成することもある。

(オ) 教員研修の焦点

- ①授業研究を通して、教師が一人ひとりの子どもの声やつぶやきをどう聴き取りどう対応しているかに注目する。
- ②教師の聴く行為を通して、教室に聴き合う関係がどのように形成されているかを検討する。
- ③研究協議は「どう教えるべきだった」というよりも、「子どもがどこで学んでいたのか」「どこで学びが閉ざされたか（つまづいていたか）」という事実に関心化した話し合いを行う。
- ④参加者全員が必ず1回は発言できるように心がける。同僚に対しても誠実さをもって学ぶ姿勢を心がける。その授業から一人ひとりが「学んだこと」を述べ、多様な見方を交流する。

(カ) 聴き合い学び合う授業づくり

- ①教師は声のテンションを落として、語る言葉を最小限に。子ども一人ひとりの発言やつぶやきの声や沈黙の声を「聴く」構えを強める。
- ②子どもの机の配置と教師の居方を工夫する。コの字、4人組（男女混合）など子どもたちが近い距離で話し合えるようにする。教師の身体が子ども全員に開かれた居方をする。教卓を脇に外すなど工夫する。
- ③授業における教師の仕事は「聴く」「つなぐ」「もどす」の3つである。
- ④聴き合い学び合う関わりを築くために、子どもに子どもを評価させない。聴き合い学び合う関わりは、評価し合う関係や教え合う関係とは異なる。
- ⑤中学年以上では、学習課題のレベルを高めに設定し、4人グループによる協同的な学びを取り入れる。「(挙手)ハイハイ授業」のイメージにとらわれず、学びを成立させることに集中する。



(2) 宇部市教育委員会(学校担当指導主事)、 宇部市学力向上推進プロジェクト委員会と連携した授業改善及び指導方法の 工夫・改善

DO ～指導案づくり, 授業実践, 授業研究

- 研究授業：全員一授業公開（学び合い）
- 重点教科領域：各学年で設定
- 全体研究協議：5回実施（低中高学年・校長・市教委主事）
全員参加型（グループ別協議&全体協議）

- 学年研究協議：放課後に授業者と参観者による協議
- 講師による指導助言

(3) 新学習指導要領に基づく授業において、学年間でのスパイラルを機能させるカリキュラム・マネジメントの工夫

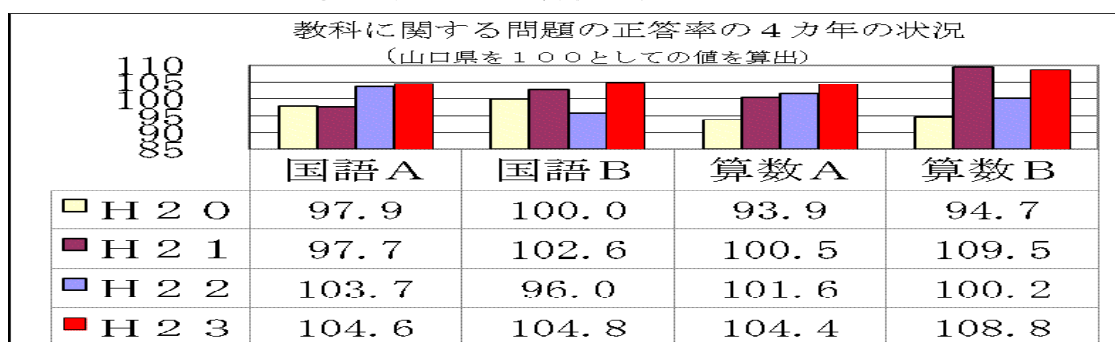
「学力向上プラン」を、全校的な重点から学年ごとに細項目を立て、毎学期考察し重点化を図る等、短期改善する学期PDCAとした。

2. 調査研究の成果及び今後の課題

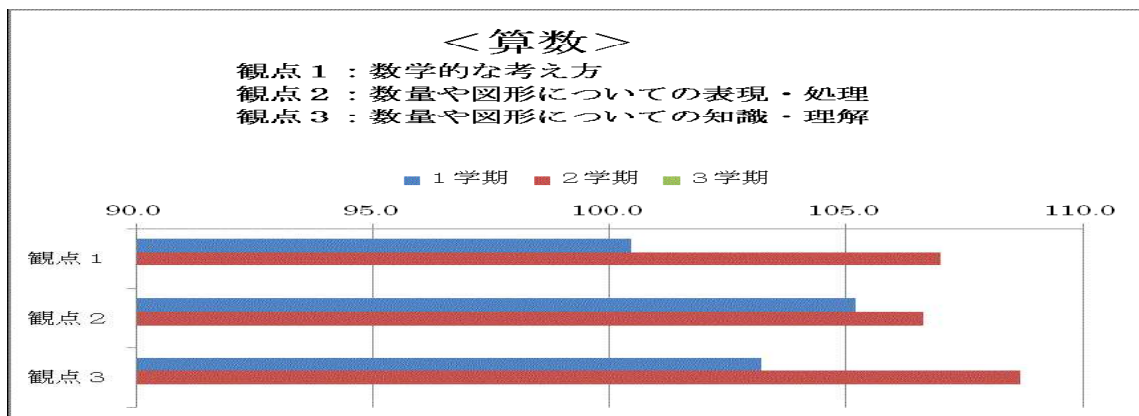
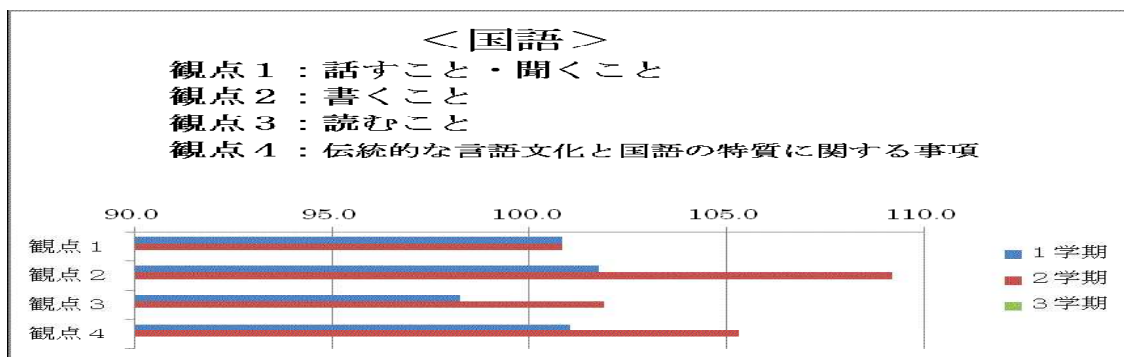
CHECK ～テストなどの調査と分析・考察、意識調査と分析・考察、研修主題・仮説の検証

(1) 単元テスト、やまぐち学習支援プログラム、全国学力検査による学力定着度の測定

資料① 全国学力・学習状況調査結果



資料② 平成23年度やまぐち学習支援プログラム結果



○全国調査による中期的動向としては、国語・算数共にA「知識・理解」分野は県平均との比較で毎年着実に向上している。B「活用」分野は、年度による変動

があり安定していない。また、授業改善を柱とした今年度内においては、県下統一の学期末問題による短期的動向によると、どの分野においても学力の伸長がうかがえる。学力を包括することは難しいが、分析と方策を積み重ねた授業改善の成果と受けとめることができる。

(2) 授業評価等による授業改善度の測定

【本校の授業改善の視点】

- A 「座学の学び」から「活動的な学び」へ
- B 「個人的な学び」から「協同的な学び」へ
- C 「獲得し記憶する学び」から「探求し反省し表現する学び」へ
- D 「伝達し説明し評価する授業」から「触発し交流し共有する授業」へ

資料③ 授業評価に関する全児童アンケート結果

2011年12月実施

視点	質問項目	そう思う%	大体そう思う%	あまり思わない%	思わない%
A 活動的な学び	①授業は、教科書以外にも考えるヒントとなるもの（絵や図、プリント、実物など）が用意されていて分かりやすい。	64	27	26	6
	②授業は、自分たちで考えたり、調べたり、体験したりする活動が楽しい。	69	21	7	1
B 協同的な学び	③授業でわからないことがあるとき、先生や友だちに「わからないから教えて」と言える。また、友だちから「教えて」と言われたときは、やさしく教えている。	64	27	5	2
	④ペアやグループでの学習では、自分の考えを進んで話したり、友だちの考えをよく聞いたりして取り組んでいる。	59	29	9	2
C 表現する学び	⑤自分の考えを文章や絵・図・表などにまとめる学習が好きである。	52	27	13	6
	⑥授業中、友だちの考えを聴き、自分の考えに取り入れることがよくある。	48	36	12	2
D 共有する授業	⑦ペアやグループで学習することで、よく分かるようになってきている。	62	28	6	2
	⑧ペアやグループで学習することが好きである。	61	25	8	4

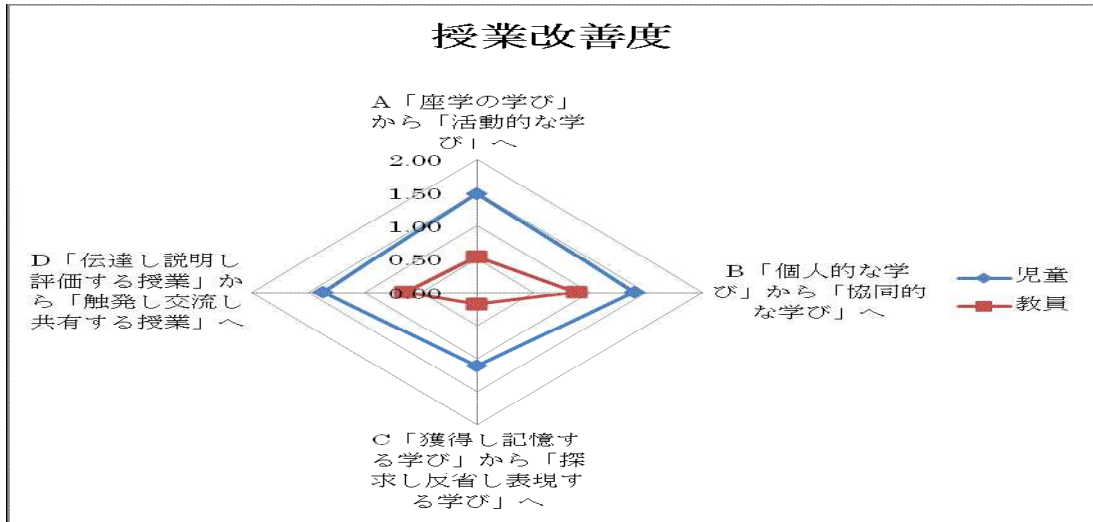
資料④ 授業改善に関する教員アンケート結果

2012年1月実施

学び合いのある授業づくりについて	そう思う%	やや思う%	あまり思わない%	思わない%
① 学び合いのある授業づくりについての研修参加が深まった。	24	47	29	0
② 学び合いのある授業研究は教師や子どもにとって成果があった。	18	71	11	0
③ 活動的な学びの工夫ができた。(A:学習形態、教材、体験の工夫)	12	65	23	0
④ 協同的な学びの工夫ができた。(B:わからない、教えて、話す、聴く)	12	76	12	0
⑤ 表現する学びの工夫ができた。(C:図、表、文章、ジャンプ課題の設定)	0	59	41	0
⑥ 共有する授業の工夫ができた。(D:ペア・グループでの学びを生かす)	0	82	18	0
⑦ 授業中での課題設定は適切にできた。(共有・ジャンプ)	0	35	60	5
⑧ 困り感を示す子ども、特別な支援を要する子どもへのケアができた。	0	65	35	0
⑨ 教師の身体技法が向上した。(立ち位置、声のトーン、動き)	6	47	47	0
⑩ 教師の「聴く・つなぐ・もどす」が向上した。	0	47	47	6

※ 質問③④⑤⑥ は「授業改善の視点ABCD」に対応する項目

資料⑤ 児童アンケート・教員アンケート結果による「授業改善度」



※ そう思う：2 大体そう思う：1 あまり思わない：-1 思わない：-2 として全児童アンケートを集計し平均したものを、「授業改善度」とし、教員アンケートにおいて項目③④⑤⑥が児童アンケートと重なっており、この4項目について、同じように集計し平均値を算出。

○同学年研修を基盤に重点教科で学びの授業デザインを模索した結果、子どもたちは学び合いのある授業を肯定的に受けとめ、「授業改善」認知度が高い。活動的・協同的な学びに対して「楽しい」「わかりやすい」という回答も多く得られ、学力向上につながった。

○教員の肯定感・満足感については個人差が大きく、1までの値は出ていない。

(児童の平均 A: 1.48 B: 1.40 C: 1.11 D: 1.37)

(教師の平均 A: 0.53 B: 0.88 C: 0.18 D: 0.65)

○児童教師ともC「表現する学び」については他に比べて値が低く、今後の課題として、「探求し反省し表現できる授業」へ改善していくことが望まれる。

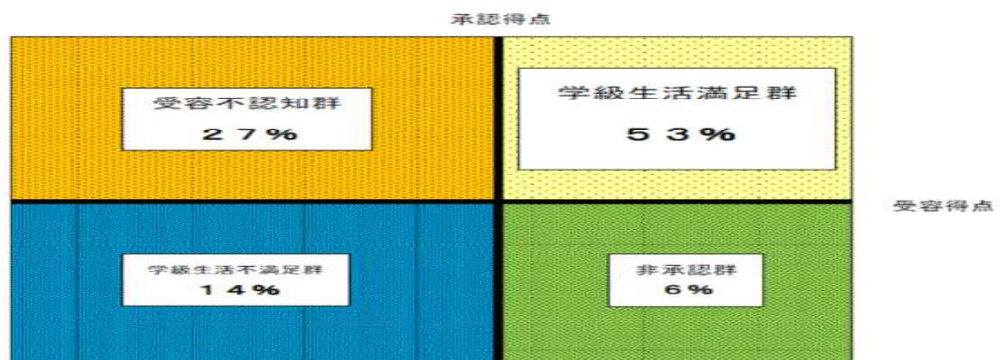
○学びの共同体の理論研修で共有されたものをもとに、一人一授業公開を通じて、各教員が試行錯誤しながら子どもの視点に立った授業づくり・授業改善を進めることができた結果、学力を向上させることができた。

(3) 学級満足度調査等による「学び合い」を支える人的学習環境状況の把握

資料⑥ 学級安心バロメーターチェック

琴芝小学校 学級安心バロメーターチェック 調査結果

●調査時期：1学期末



※ 子ども一人ひとりがそれぞれの所属する学級にどの程度満足しているのかを、受容度と承認度から質問紙調査(20項目)を実施。学級満足群、受容不認知群、非承認群、学級生活不満足群の4セグメント構造で説明しようとするこの調査を、学期ごとに全学級・全児童実施。

○1学期末結果が、2学期末になると「学級生活満足群」が53%から65%に上昇し、「非承認群」が6%から1%に減少した。時期を追って安定した学級生活が形成されてきたことがうかがえ、学力向上を支える一因となった。

ACTION ~今後の課題

◎本校児童の「表現力・活用力」とりわけ「話す・聞く」の学力向上を図るために、新年度は活動の場を充実した上、国語科を中心に各教科・領域でも力をつける支援を行い、重点課題として推進していく。

◎「学び合い」が授業改善を呼び込み、学力向上につながっているとの認識が高まったが、「学び合い」の実践過程で授業デザインや課題設定等の新たな問題点が生じてきており、継続的な研修が必要である。(教師の「聴く」「つなぐ」「もどす」といった場面や、「立ち位置」「声のトーン」「動き」の技法や出番等々)

◎新学習指導要領の改訂点を念頭に置き、実践記録を重ね学年間のカリキュラム・マネジメント効果的に取り入れていく。

◎学力形成には学級の支持的風土も相関しており、子どもたち同士の信頼関係を高める学級経営並びに全校体制を深化する。また、保護者も学力向上の大きな土台となるので、コミュニティースクールとして、その関わりを強める。